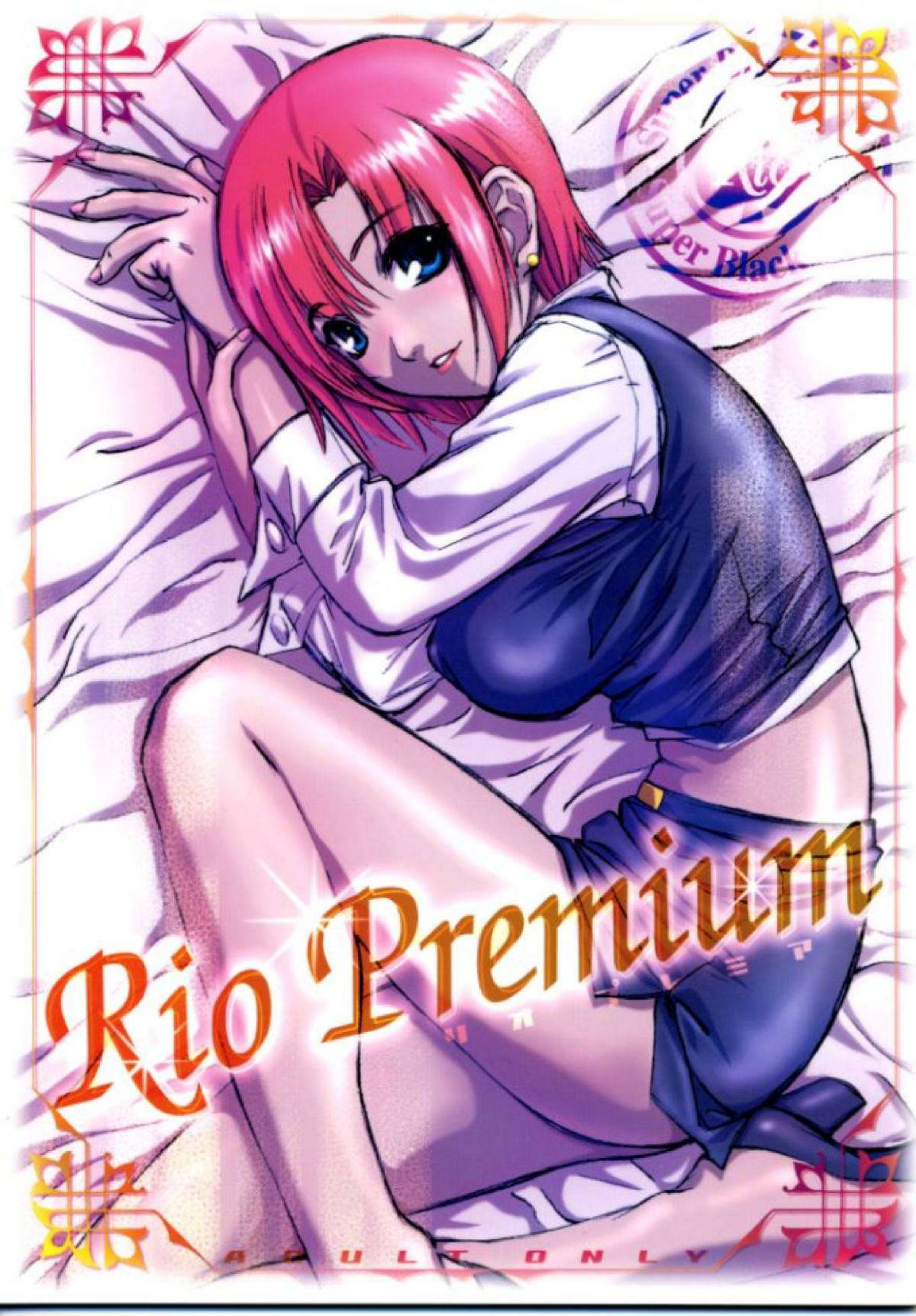
Rio Premium
ADULT ONLY

いらっしゃいませ

新台の
リオ自身が
パチスロ機です

うふ。

リオ自身がパチスロ機

ぺちっ

よろしくね

今回は特別に
遊戯方法を
教えちゃいます

……？

まずは・・・リオ自身にコインを三枚挿入して下さい

コイン以外はダメですよ

しゅっ

しゅっ

しゅっ

しゅっ

ドキ

ドキ

ねーんはやくーっ

くー！たまらん！

！

ストップ！

だめですまった！

口でならいいですよ・・
ピチャピチャ
・・・・んっ・・・
えっ・・口じゃイヤですか
しかたない・・
今回だけ特別ですよ・・・・
あっ！
あん
ぐいっ
お客様の・・・太くて凄いです
ぐぐっ
あん！

はあ
あっ
ひっ
あう
ダメです
そんなに激しくしては
故障の原因に・・・
はあ・・
ああん！
はあ
他のお客様の
ご迷惑に
なりますので

ひい！

ドクン

ドクン

ドクン

ああん

オーバーフローに・・・

そんなにたくさん射精されたら

ドクッ

ひいっ！

あっ・・・

・・・

お客様の精液でリオのお腹がいっぱいに・・・

ビクン

ビクン

わたしもついイッちゃった・・・

おめでとうございます！

お客様

プレミアムに当選されました！

プレミアムは
ミント自身が
パチスロ機
でーす

えっ？

ほーら
可愛いでしょ！
クマさん付きですよー

さあー！

グッ

コインを
三枚挿入して
ください

ボ

そんなプレミアム
あるわけない
わー！

・・・！

・・・と
こんなパチスロ台
絶対に
ありえないので
パチンコ屋さんで
探さないでね
次は「十字架」
です。

またねー！

END

ミント最強伝説

犬崎みくり

チュッ♡

!

!!

うちゃ

モガ

んんー

モガ モガ

はぁ……っ

くちゃっ くちゃっ

はっ

んっ

はぁ

ぴちゃ

ぴちゃ

はぁ

はい あーんして♪

ティファニーさん……

なにかあるんですか…

ふぁ…

いやな事忘れさせて

あ・け・る♪

バタン!!

そうそうこのソファーベッドにもなるのよね~

どさっ

きゃあ!

ちょっ!!

なっ…なにを…

リオかわい~♪

あっあのっ誰か入ってきたら…

モーマンタイ

大丈夫！

鍵はさっき
明めた！

ビッ

いつの間に…

さぁ
気持ちいいことしましょーね

むにっ

むにっ

あん…

ちゅっ

ちゅっ

むにっ

むにっ

はぁん

くにっ

くにっ

くりゅ

あぁっ…

ビクッ

はぁ

はぁ

…ッ

…ッ

ダメじゃないでしょー

こんなに
おまんこ
濡れ濡れなのにー

そんなに
舐めないでぇ・・・・

プル

プル…

プル…

ぴちゃ

ぴちゃ

ぴちゃ

じゃっ ティファニー スペシャルで
いかせちゃうぞー
はい、なめてー
ヂカッ
ちゅ ちゅ ちゅ
ちゅ ちゅ ちゅ
この辺が スペシャル
パー パパパーン
ふふふ 準備おっけー♪

ほーら…
リオちゃんの中に
私のおちんちんが
入っちゃったわよ～♪

ふぁあ…
お、大きいの…

ぷるぷる

ぐちゅぐちゅ

はぁっ
はぁっ

たぷんっ

いいっ！

たぷんっ

ぐちゅ

気持ち
いいっ！！

ぐちゅ

ぐっ
ぐっ
ぐっ

・ゃ・ゎゆけ!! いすたー

SHIZO

ふふ〜ん♪
あれ？

はぁ〜〜〜〜
今日も負けて
ばっかりだったな…
…ばっかりっぽ…

子供が
あんな所に…？

ティファニーさ〜ん
勝つ方法って
ないですかね〜？
びこれっ

子供がカジノ
なんかに来ちゃ
ダメだよ！
めっ☆

簡単よ！
滝に
打たれて
修行よ!!

私っこう見えても
20歳なんだけど
ウソ!!

信じるなよー!

翌日
え!?
…信じちゃった
店長
滝巡りの
旅に出ます
リオ

Super Black Jack
Rio

衣替え
ぱぷりこ

視姦されているような感覚。
リオが今ほわっているのは、まさにそれだった。
ネットリと身体に絡み付き、頭のてっぺんから指の先まで舐め回す視線に、リオの動揺は誰でも激しくなり、追い詰められていく。
――も、もう…こんなのやだよぉ…っ。恥かし過ぎてどうにかなりそう……。
グラリと視界が歪む程の羞恥と興奮で、リオは理性が擦り切れていくのを感じずにはいられなかった。

◇ ◇ ◇

普段から露出度の高い制服で働いているリオにとって、好奇の目で見られる事には多少の免疫が出来ている。
しかし、今日の客の視線の種類はあからさまに違う。
――やっぱり、こんなの着るんじゃなかった…。何が衣替えよ。何が有名デザイナーが手掛けた服よっ。
そう言って店長から手渡された事を思い出したリオは、フツフツと怒りを込み上げさせた。
――こんなの、ただの透け透けなHなだけの服じゃない！　し、しかも……ふぇっ…下着なしなんてぇ～～～～!!
月が替わったのを機に、という事で渡された新しい制服はシースルー素材。
しかも、それを全裸で着用との店長命令。
いつのも制服とデザインも色もほとんど同じモノであるため、大事な部分はその濃い色と光の反射に助けられて見え難くなっているものの、シースルーである事には変わりなく。
しかもト着を着けていないとなれば、意図的に目を凝らした人間にとって周りよりも色素の濃いその場所を探る事は容易い。
限りない薄さとフィット感を追求した新素材で出来ているそれは、緊張でじっとりと汗ばむリオの肌に密着なく張りつき、身体のラインを殊更に強調していく。
さながらボディーペインティングを施したように、ピッチリと肌に食い込む制服。
張りついた事によって透過度を増し、乳首の勃起具合から、恥丘のモの流れ具合までがバッチリと拝めてしまう。
待ってましたとばかりに、身を乗り出さんばかりの興奮を露にする男たちの様子に、リオはビクンッと身体を震わせる。
断固拒否の姿勢を貫こうとしたリオに突きつけられた、破格の特別手当という甘いエサに思わず飛びついてしまった自分を心底呪いつつ、張りついた布地を剥がそうと、スカートの前裾をキュッと摘んでみる。
しかし、そんなリオの努力はあまり効果がないばかりか、羞恥に震えながらも淫らさを増していく姿が、余計に客たちの興奮を高めている事に彼女が気がつくはずもなく。
テーブルを囲む客たちは、そのリオの手に無言の圧力を掛け始める。
中にはリオを贔屓にしてくれている顔馴染みの客も含まれている事が、リオの羞恥を更に駆り立てていく。
――うー…、そんなに見ないでよぉ～。
視線を集める事にじっとりと汗が滲む。
片手だけではカードさばきに支障をきたすために、仕方なく重たい動作で裾から指を離せば、隙だらけを失って直接注がれる淫らな視線に、リオは無意識にその奥に力を入れてしまう。
「……っ」
――や、やだっ…!?
その内側の収縮の感触が、異常なまでに過敏にリオ自身に伝わって、そこまで意図していなかった本人を慌てさせた。
一度動いた粘膜は連鎖反応を起こして、その後も緩度の収縮を繰り返す。
キュウンッ…と窄まる感覚は、快楽を得るための熱に連動して…。
――ん…ぁ…もしかして、私濡れてきちゃってる？
…んぁっ…あ…。
内側に普段とは違う湿り気を自覚した途端、止めたはずの収縮が連続して起こってしまい、甘い疼れを発動させた。
その刺激で、更に奥を締めつけてしまう。
自分で絞っている悪循環を立ち切ろうと、慌ててテーブルに目線を移すと、目の前の男が唇の端をイヤらしく上げてニヤニヤとリオを見ていた。
――!!　ち、もしかしてバレ…た？
瞬間、ドクンッと大きく跳ねる鼓動と強張った指先のせいで、手元のカードを取りこぼしてしまう。
「あ…っ！」
男の視線から逃れられるチャンスとばかりに、ヒラリと空を舞って床に落ちたカードを追って、素早くテーブルの下へ潜んだリオの視界に入ったのは…。
テーブルを囲んで座る男たちの下半身と、その間でズボンを持ち上げている存在。
「…っ!!」
股間が大きく膨れ上がっているのを見たリオは、息を詰まらせて動けなくなってしまう。
目の前であからさまな興奮を示す魔。
自分を対象にされた結果を目の当たりにし、リオの全身を電流に似た衝撃が走る。
今まで男たちの視線を受けるだけで精一杯だったリオは、この瞬間もっと具体的な存在を意識して、秘部に自ら力を込めた。
「…んぁ」
途端に、先程とは比べ物にならない量の分泌液が湧き出したのを感じ、リオの鼓動が早まる。
そんなリオの様子を知ってか、男の一人の手がするりと降りて、流れるような動作でズボンのファスナーを開

、膨らみの元をズルリと取り出して見せた。
――なっ、な、なんて事を～～～!!
高るものが無くなって解放されたペニスは、勢い良く男の手の中から飛び出し、リオに向けて反り返えるとビクビクと波打ちながら更に角度を加えていく。
リオに見せ、見られている。
その事実が、見知らぬ男を最大限に興奮させているのだ。
――し、信じられない!! こんな変態男なんて放っておいて、早く立ち上がらなくちゃ…!
顔の見えない男に対して荒りの言葉を心の中で叫びながら、リオが床に手をついて力を入れようとした矢先。
目の前で男の手が手の中のモノを擦り始めた。
明かな目的を含んだ動きで…。
初めて見る男性の自慰行為。
見てはいけないと頭の中で警告音が鳴り響くが、リオの身体は手をついたまま微動だにせず、視線も釘付け。
どんどん角度を増し、明かりが遮断された中でも鈍く光ってそそり勃つモノが、ズーム機能がついているはずがないにも関わらず、眼前数センチに来ているような迫力でもってリオには映った。
――す…ごいっ。あんなに勃ってる…。太くて長くて、先端が…っ。こ、こんなグロテスクなモノだった?
自然と口の中に唾液が溜まってきてしまうのに渇きを覚える喉に、リオは何度も喉を鳴らして唾液を飲み込んだ。
こんなにマジマジと男性の性器を見た事などないリオは、勝手に動く黒目でもって、その先から根元の袋に至るまでを、脳裏に焼きつけんばかりに凝視した。
それは、すっかり先程までと逆の立場。
――わ、私は男の人のなんて見たって、興奮したりしないもん! どうにかしたいなんてっ…そ、そんな…こと……。
どうにかしたい…?
どうにか…。
…あれを…ここ…に…!
ここに。
そう示した部分に、白い指が触れた。
「ふあっ…!」
その無意識の行動に、リオの身体を一際強い衝撃が走る。
全身が余韻に震え、リオの口からは甘い息が漏れた。
――気持ち…いい…っ!
一度刺激を待てしまえば、身体はそれ以上を求めずにはいられなくなる。
そのスイッチを自ら押してしまったリオに、
「リオちゃ～ん?」
頭上から声が降ってきた。
「…!!」
取り戻し掛けた理性でもって、フラフラと立ち上がってみれば、一斉に注がれる情欲の視線。
「…あっ…あぁ…」
どうにかなってしまいそうな激しい衝動と眩暈で、リオは混乱し始める。
理性と欲望との狭間にいる状態は、それを仕掛けた人間には手に取るように伝わってくるもので。
雄の嗅覚は、リオの変化を敏感に感じ取っていた。
限界寸前のリオ。
テーブルにつく誰もが、ほくそ笑む。
それは男たちの欲を存分に煽り、更なる無言の誘惑をリオに施していった。
目に見えず、実際触れられている訳でもない他人からの視線に、リオの身体は大勢の人からの接触を受けているような錯覚に捕らわれ。
多くの手が這いずり回り、撫で擦る。
しかし、所詮は架空の感触。
テーブルの下で味わったような決定的な刺激を得られる訳でないそれは、逆にリオを段々と苦しめていく。
雨のように全身に染み渡って…。
その淫靡な感触が、小さなテーブルを囲んだ空間で繰り広げられている。
この勝負の行方は、誰の目から見ても明かだった。
360度際限無く注がれる雄の視線は、リオを陥落させるのには十分過ぎる程で。
男たち同様、リオも仕事どころではなくなっていた。
――このまま目の前の人たちのもので……。
テーブルの下で見た大きく反り返ったモノで、今スキズキと疼く場所を抉って貰えたら、どんなにか気持ちいいだろう。
理性が効かない領域まで進み掛けているリオの精神が、今まさに焼き尽くされて、微細な線で辛うじて繋がっている状態。
――……して…欲しい……。
テーブルの下で見た、グロテスクとさえ映ったあの固そうな長い棒を、この身体の一番奥に入れて欲しいと。
そして、グチャグチャに掻き回して欲しい。
リオの頭の中を一杯にしているのは、その時の行為だけ。
テーブルの陰でユラユラと揺れる二つのマシュマロの丘の割れ目の奥からは、光る液体が白い太腿を伝って垂れていく。
灼熱の温度を持って外気に晒された液が、急激に冷えて火照った足を流れる感触の正体が何なのか。
興奮の絶頂にいるリオには解り過ぎる程で、淫らな追い打ちを掛けた。
目の前の人間の誰もが、それを待っている。
そう思うだけでリオの身体は歓喜に震え、誰でも良いからそれを私に頂戴、と懇願してしまいそうになった。
いや、し掛けている。
擦り合わせた太腿の付け根からの、どうにもならない疼きを確実な快楽に変える事。
リオは欲望の命じるままに、一番手前に座る客へとフ

ラリと手を伸ばした。
そして…濡れた唇を開き掛けた時、
『ガシャーンッ!!』
リオのテーブルのすぐ脇を通っていたバニーが、持っていたビールジョッキを引っくり返し、派手な音と共にグラスが粉々に砕け散った。
――はっ！　い、今…私何をしようと!?
そのけたたましい音は、会場内を一瞬の静寂に包むと共に、リオの飲み込まれ掛けた意識を取り戻すのには十分な効果をもたらした。
しかし、記憶まで飛ばしていた訳ではないため、直前に自分が取り掛けた行動に、リオの動揺は激しく、
急激過ぎた理性の回復は、混乱と後悔でリオを青ざめさせた。
――ダメ!!　これ以上ここにいたら、とんでもない事になるっ！
ごめんなさい！　ちょっと気分が悪くなっちゃって、これで失礼しますっ」
残る理性を総動員して、頭を下げながら男たちに告げると、ほとんど一直線にカジノ内を横切ってスタッフ専用出入り口に走った。

◇　◇　◇

「……はあ…はあっ……！」
走った事による息切れとも、興奮による酸欠とも取れる胸からの荒い息を吐きながら、リオはヨロヨロと通路を歩いていた。
カジノ内の熱気がワソのように、扉を一つ隔てたそこはヒンヤリとした空気が流れ、リオの火照った肌に心地良く触れる。
しかし、それだけで内側の熱が冷めるはずもなく、
――早く何処かで……！　どうにかしたいよぉ…!!
今にも下腹部に降りそうになる手を、爪が食い込む程にギュッと握る事でなんとか耐えていた。
男たちの視線から逃れた今、我慢の効かないところまで来いてしまっている情欲を抑える手段は一つだけ。
それが出来る場所を求めて、リオの足が止まったのは女子トイレ。
――ここなら、誰かに見られないで…できる！
早く疼きを止めたくて、早く熱を解放したくて、少しだけ軽やかになった足取りでトイレのドアに手をつこうとした時…。
「リオちゃん、トイレに入ってどうするの？」
「!?」
聞き覚えのある、そして今は限りなく聞きたくない部類に入る声が背後から響き、リオの身体は飛び上がらんばかりに大きく跳ねた。
背中を幾筋もの汗が流れる。
「リオちゃん、客を途中で放ったままにしちゃいけないなぁ」
「気分が悪いなら診てあげるよ」
最初に聞こえた馴染みの客の他にも、次から次へと聞こえる男たちの声。
それが皆、あのテーブルに居た客である事は、リオにもすぐに理解出来た。
――せっかく逃げて来たのに!!　足が動かない…!?
ちょ、ちょっと…そんなに俺に来ないで……！　来ないでぇー!!
固まったように動けないでいるリオの身体を、男たちは素早く取り囲んでしまう。
幾つものハアハアという激しい息遣いが肌に当たり、リオをイヤらしく刺激する。
「ん…ぁあ…」
今のリオには、息が当たる刺激すら毒でしかなく。
――やだやだぁ！　手を握らないで…っ。あ…変なとこ触らないでっ！
「だいぶ具合悪そうだね。顔えてるよ？」
「息も荒いね。楽ってあげようねぇ」
唇をピクピクと震わせているリオに対し、男たちは口々に気遣う風の言葉を発して、身動きの取れないリオの身体を撫で回す。
「…や…やめ…、ふっ…ぁあ…」
いくつもの手が這い回る感触に、リオは無理矢理押さえ込んでいた欲がザワザワと騒ぎ出すの感じた。
――また、私おかしな事をしちゃう…？　そんなのいやぁ～…。
慌てて頭を横に何度も振って、その可能性を振り払おうとするが…。
「おっと、逃がさないぜ」
一人が遠くから聞こえてきた靴の音を敏感に捉えると、周りに居た男たちが打ち合わせでもしたかのような瞬時の動きでもって、リオを囲めた全員が扉の向こうに消えた。

◇　◇　◇

「や、やめっ！　離して…っ！」
あっという間に個室に連れ込まれ、狭い空間で何本もの手で自由を奪われた恰好になったリオは、なんとか部こうともがくが。
「お嬢らししちゃってる姿を、他の人に見られてもいいのかな？」
「!!」
耳元で囁かれた事実に、思わず男たちの方を向いた。
「気がつかないと思った？」
「リオちゃんが俺たちの見てる前で、乳首ピンピンにして、おまんこグチュグチュにしちゃって困ってる姿は、とっても可愛かったよ」
こんなにね、と乳首の上を指先で軽く円を描かれて、リオの身体に痺れが走る。
「リオちゃんがこんなにイヤらしい子だったなんて、知

らなかったなぁ。あ、でもこんな服着てるリオちゃんが、イヤらしくない訳ないか」
「こんな透け透けの着て、客を誘惑だもんな。本物の淫乱だぜ！」
「ちがっ！　これは店長が着ろって言うから…ああんっ！」
リオの反論は、すぐに艶声に塗り替わる。
最初からそのつもり満々の手たちが、一斉にリオの身体を這い回り、目的の場所への無遠慮の刺激を開始したのだ。
指を弾き返す程に固くしこった乳首は、指に挟まれて形を変えられて。
熱くトロけきって、お漏らしを繰り返す秘部は、無骨な指を何本も何の抵抗もなく飲み込んで。
透明な愛液は指に絡まり、激しい摩擦でもって細かい泡を浮かび上がらせる。
白く濁って滴っていく様子は、室内に響く大きな水音によってリオにも伝えられた。
――ああ…っ！　こんな音…恥かしいよぉ～…。
耳を塞ぐ事もままならない状況で、誰でも聞かされる男たちの卑猥な言葉と、自分の秘部から発せられている音。
そのどちらもがリオを昂ぶらせ、麻痺させていく。
「凄いね！　こんなに大洪水だよ」
「あふっ…あっあぁぁ！…やっ…」
「俺たちがリオちゃんをジーッと見ちゃったから？」
「大事なリオちゃんをこんな風にしちゃった責任は、きちんと取ってあげるね♪」
「そっ…んな…あひぃ…んんっ…くあぁっあぁっ…！」
埋め込んだ指先をクイッと曲げて、敏感な粘膜を引っ掻くように擦れば、リオは激しく戦慄き淫らに啼く。
中に入れなかった指は、真っ赤に充血して皮から飛び出している豆を捏ねくり回して。
拒絶を口にしながらも、焦がれた本物の刺激を得て、リオの身体は歓喜に震え精一杯の歓迎の反応を見せた。
リオの理性はドロドロに溶け、まさに風前の灯。
「リオちゃん。コレ…覚えてる？」
「……？　…ひゃぁ!!」
手の中にニュルッと入ってきた熱い塊。
何を握らされたのか解らなかったリオだが、視線を向けた先にあったのを確認した瞬間、思いきりそれを手放そうとした。
が、…それは上から別の大きな手で押さえ込まれたせいで叶わず。
正体の掴めたそれを、不本意なまま握らされて。
耳の傍で聞こえる鼓動が、つんざく程に鳴り響いた。
――こ、こ、これってぇ…!!
「さっき、リオちゃんが見てたチンポだよ。僕のオナニー見て興奮しちゃってたよね？」
「!?」
――あの時の…!?
リオの頭の中は、テーブルの下で見させられた初めての男性の自慰行為のリプレイ。
鮮明に浮かび上がるその時のモノが、今自分の手の中にある。
どうにかしたい、されたいと思ったモノが…。
記憶と現実の映像が合致した時、リオの中で何かがパチンと音を立てて弾けた。
ゴキュッと大きく喉を鳴らしたリオは、頭で考えるより早く、手をゆるりと動かし始めたのだ。
――これが…これがあの時の…おチンチン……。
感触を確かめるように、脈打つ熱さを求めるように、男が悦ぶように…。
「おっ！　大胆だねぇ♪　んっ…いいよ、リオちゃん」
リオがその気になったのを見て取った男たちは、それまで以上にがっつきリオを四方から責め立てた。
足の片方を持ち上げられ、不安定な体勢を取らされれば、露になった秘部は男たちの好奇の目に晒されピクピクと震えながら、汁を垂らしていく。
――あぁ……っ、みんなに…見られてる！　そんなにジッと見ないで…。
羞恥で震えながらも、抵抗する事はなく。
リオは、男たちの行動を待った。
「リオちゃんのまんこが拝めるなんてゆせだよなぁ」
「拝むだけでいいのかよ？」
「まさか！　中まで隅々堪能させてもらうさ♪」
目で存分に楽しんだ男たちは、身体中の感触を確かめ始める。
「あふっ…ああぁんっ…そこ、は…っ。くはぁ…」
お尻の穴の入り口の襞をグニグニと揉まれ、真っ先に浮かんだ嫌悪感に、そこをキュッと窄めたものの。
前からの大量の液がアナルへの侵入を容易にしてしまい、あっという間にヌルリと根元まで埋没した指は、即座に内部で暴れ回る。
「リオちゃんはアナル体験ないの？」
「そ…んなの…っ」
ある訳がないとばかりに、即座に首を横に振ってみれば、
「じゃあ、しっかりほぐしてあげないとね♪」
今のリオには理解不明な言葉と共に、更にもう一本増やされた。
「ひぃ…んっ！　やぁ…そん、なぁ…あっあぁっ…んはぁ…」
狭い穴にめり込む感覚に一瞬身体を強張らせるが、すぐにそこからザワザワとした快感を覚え、戸惑いながらも順応していく。
「へへっ、前がぎゅうぎゅう締まるぜ。アナルの素質十分じゃねえか。こっちも負けてらんねえなっ」
そう言って、ヴァギナ内部を掻き回していた指を、激しく出し入れし始めた。
「あふっ…あくぁっ…やっ…ダメッ…ダメェーッ…あっあぁーーっ」

前後を激しく擦られたリオは、強過ぎる快感についていけないまま絶頂を迎えてしまう。
「派手にイったね、リオちゃん」
「もうイっちゃったら後が大変なのになあ…」
「その分、俺たちは楽しめるけどな♪」
余韻でビクビク痙攣するリオを尻目に、グプッと大きな音を立てながら溶けた内部から指を引き抜くと、男は空席になった穴にいきり勃ったモノをねじ入れる。
「あぁぁ―…っ―!! あひっ…んはぁぁ―!」
イッたばかりの身体に、それは強烈過ぎて。
目の前が真っ白に弾けたような衝撃と共に、壮絶な快感がリオを襲った。
何かに捕まっていないと、どうにかなりそうで。
地獄に、リオは目の前にいた男の身体に抱きついた。
「嬉しいよ♪ リオちゃんからの熱烈なお誘いなんて」
胸にしがみついてきたリオの手を引き剥がすと、そのままズリ降ろして、止まらない喘ぎ声を溢れさせる口に自らのペニスを打ち込んだ。
「むぐぅ…っ! んむっ…んんっ」
「歯を当てちゃダメだよ。舌を絡ませてしっかりフェラしてね」
苦しさで涙が滲むリオの表情をウットリと見下ろしながら、優しく話し掛ければ、
「…んふっ…んっんんぅ…」
命じられるままに、鼻に掛かった声を漏らしながら口全体を使って奉仕を始める。
そんな中で感じたお尻への違和感。
次の瞬間には、
「!! そ、そこは…っ! やめっ……くひぃっ! あっあっ…あひーっ…ああっ!」
いっそメリメリという音が聞こえてきそうなくらいの衝撃と圧迫感に、リオは悲鳴にも似た声を上げた。
先端のエラ部分を通過してからは、スムーズに挿入は進み、
「やっぱアナルの締めつけはすげえな! 引き千切られそうだぜ…」
軽く声を弾ませながら発した頃には、男のペニスは根元までしっかりとリオのお尻に収まっていた。
「どうだい? リオちゃん。俺のチンポの味は」
リオに割り込むように、コルコルと腰を揺らしてから、始めは小さく…そして段々と出し入れの動作を深くしていった。
「やあっ…あぁっ…動かないで…、んくっ…ひあっ!」
少し動くたびに、内臓まで持っていかれそうな感覚。
ギチギチに隙間なく埋められた異物に、排除しようとすればする程粘膜は絡みついて。
散々指で解されたそこは、痛みを伴う事はなく。
感覚を追えば、すぐに何とも言えない快楽をリオに送ってよこした。
――な、なにコレ? お尻が…気持ちいいなんて…っ! そんなっ…!
指を挿入された時以上の混乱をきたす頭の中とは反対に、身体は瞬時に、そしてそれ以上の早さでもって今まで経験した事がないような悦楽の世界へ持ち主を引き摺り込む。
「あふっ…あっあぁん…かは…っ」
「ほら、リオちゃん。まんことアナルに同時に突っ込まれてよがるのは良いけど、お口が止まってるよ。もっと奥までしゃぶって…っ」
頭を前方へ押し出されれば、自然と喉奥まで押し入る異物に、むせそうになるのを必死で抑えて、リオは唾液と精液でベトベトになったペニスに舌を絡ませた。
頭上でうめく声と同時に、注ぎ込まれる大量の液体。
独特の味を味わう余裕などなく、口端から白い帯びを何本も垂らせながら飲み込んでいく。
「…んくっ…あぁっ…! むぐぅっ! んん…っ」
なんとか口を開けられるまでに消化したリオが安堵の息を漏らせば、タイミングを見計らったように、また別のペニスを口腔内に捻じ込まれ、
「リオちゃん、休んでるヒマなんて無いよぉ。リオちゃんに突っ込みたくてウズウズしてる奴が後ろに何人もつっかえてんだから」
そんな不穏な言葉を浴びせられる。
「…!」
「くぅっ! 今、リオちゃんのまんこの締めつけが強くなったぜ」
「へえ~。リオちゃん複数プレイが大好きなんだ! 俺たち気が合うねぇ♪」
――ち、ちが…っ! そんなこと! でも…でも、いっぱいのおチンチン…気持ちいいー!
男たちの動き合わせてリオは腰を振り、手をしごき、舌を絡めて、全てを委ね陶酔していった。
その間にもリオは何度も絶頂を味合わされ、それでも続く責めを狂乱状態で受け入れるしかなく。
「…もっ…もう…らめぇ…イクッ…イクのぉ……! イッてぇ―…っ!!」
リオの涙でグシャグシャになりながらの懇願に、本能全開で責め立て続けた男たちにも終わりが見えて…、
「ああっ…くひぃ…んっ…あっああ…ああぁぁーっ!」
ビクビクと一際大きく跳ねたリオを合図とばかりに、男たちは中に外に…その欲望のたけを大量に放った。
文字通り全身に白濁の液を浴び、放心状態でズルズルと力無くへたり込んだリオに、
「疲れちゃった? でも、まだまだ休むのは早いよ。まだリオちゃんのまんこに突っ込みたい男はいっぱいいるからね。ほらっ!」
個室の扉が開いて、指をかざした先には、スラリと並んだ雄たちが…。
「…あ…あぁ……」
そんな彼らを、焦点の合わないブルーの瞳が妖しく揺れながら見つめた。

<END>

FREE TALK

こんにちは。
毎回リオたんの制服に萌えて、ティファニーさんの
バニーにトキめいている海老です。
制服フェチには堪らん仕様だわ〜。
今回フリートークページをもらった訳ですが、
ＳＢＪネタは回避！
（飲まれまくりの記憶しかないから…ね）
パチスロといえば、吉宗の音楽担当の方に、
オリジナルのほうで制作中のアニメの
ＯＰを作ってもらってるので、
サントラの売れ行きばっかりが
気になって…。（笑）
（祝！２０万枚!! スゲー　めで鯛♪）
本人のノリノリ歌入りＯＰは、
サイトで試聴ができますので、
試しに一曲いかがでしょ？
ちょっと特殊ジャンルですが…。
■ vingt-et-huit Web サイト
http://www1.odn.ne.jp/tuna/vingt.htm
（…こんな所でＣＭしちゃって申し訳ないです！）

エスティー500
ST500

お求めは下記書店にてどうぞ!!
コミックとらのあな・メロンブックス
メッセサンオー・K-BOOKS・信長書店

きょうせいかいじょ

強制解除

NET本『強制解除』
近日発売予定!!
詳細はSTUDIO PAL HPにて。

http://www2.odn.ne.jp/studio-pal/

イベントでは、リオたんグッズの販売も行っております。
（クッション・メモパッド・トートバッグ etc.）
お近くへお寄りの際は、ぜひどうぞ。
※参加イベント等の詳細は、Webサイトをご覧ください。

Rio Premium

2004 October
STUDIO PAL+スタジオFOX

無断転載・複製・デジタルデータ化によるネット上での公開厳禁!!

リオ プレミアム
スタジオ パル
Rio Premium